

【診 断】 上下顎叢生

【顔貌所見】 側面：ストレートタイプ 正面：左右対称

【骨格系所見】 側面：SNAは、標準範囲内。SNBは大きく下顎の前方位を呈している。正面：左右対称。

【歯系所見】 大臼歯関係：Angle I 級，歯軸傾斜：上下顎前歯の唇側傾斜。正中線：顔面正中に対して上下顎前歯ともに一致している。

【治療方針】

1. 上顎左右側第一小臼歯抜去，
トランスパラタルアーチ装着
2. マルチブラケット装置
下顎左右側第一小臼歯抜去
3. 保定
上下顎左右側第三大臼歯抜去

【治療期間】 2年5か月

【治療結果】 上顎左右側犬歯が萌出余地不足による低位唇側転位を呈していたため，はじめに上顎左右側第一小臼歯を抜去し，犬歯の萌出誘導を行ったのちにマルチブラケット装置による本格矯正治療を開始した。上下顎左右側第一小臼歯抜去を適用したことで，アーチリングスディスクレパンシーの改善を達成した。

症例展示3) プリアジャステッドアプライアンスによって治療した2症例

○田中 久，福井 和徳，氷室 利彦
(奥羽大・歯・附属病院
奥羽大・歯・成長発育歯・矯正学分野)

【第一症例】

治療開始年齢：24歳1か月，女性。

【診 断】 顎変形症**【治療方法と経過】**

2002. 2.12 術前矯正として，プリアジャステッドアプライアンスを用いて治療を開始した。

2003.10.18 顎矯正手術（下顎のみ）

2004.12.02 保定開始，上顎：Begg type，下顎：Begg type

【結 果】 術前矯正により下顎前歯の舌側傾斜，顎矯正手術により，下顎の右側変位，前突感は修正された。左側から右側にかけての交叉咬合，ミッ

ドラインの右側変位も解消された。また顎関節部の痛み，クリック音も無くなった。

【考 察】 当初，術前矯正の期間は半年から1年間を予定したが，下顎右側第二大臼歯は根管充填がされており，将来的に保存が不可能となる恐れもあり，抜歯後に下顎右側第三大臼歯を近心移動し第二大臼歯として利用することにした。

【第二症例】

治療開始年齢：13歳7か月，女性。

【診 断】 上顎前突**【治療方法と経過】**

1999.11.02 プリアジャステッドアプライアンスを用いて治療を開始した。

2003.01.08 保定開始，上顎：Begg type，下顎：小臼歯間Bonded retainer

【結 果】 大臼歯の咬合関係は両側 I 級，上下顎の正中線は顔面正中に一致し良好な咬合関係に改善された。

【考 察】 当初，ヘッドギアによる上顎大臼歯の遠心移動を計画していたが，協力が得られず中止した。顎外固定装置の使用は患者に過大な精神的，肉体的負担を深く認識させる装置であることを深く認識させられた。患者に協力性を求めないインプラントアンカレッジの使用が望まれる症例であった。

症例展示4) 平成18年度歯科矯正学講座研修プログラム修了生による症例報告

○中村 真治，氷室 利彦
(奥羽大・歯・成長発育歯)

平成18年度歯科矯正学講座研修プログラムを修了し，プリアジャステッドアプライアンスを用いた症例を報告する。

【症例概要】

【主 訴】 前歯部叢生

【顔貌所見】 Straight typeであるがオトガイ部に緊張を認める。

【骨格系の所見】 上下顎の前後的位置関係に問題はない。

【歯系の所見】 大臼歯関係はClass I，APO line に対し上顎中切歯は9.0mm，下顎中切歯は6.0mm，U1-FHは109°で舌側傾斜を認めた。

【機能系所見】悪習癖，鼻咽腔疾患，顎関節疾患はなく，下顎の機能性偏位は認めなかった。

【診 断】叢生

【治療方針】前歯部叢生と上顎前歯の後方移動を目的に，上下顎左右第一小臼歯の抜去を行った。0.022スロットを適用し，治療の初期は0.016インチと0.019×0.025インチのHeat activated nickel-titanium wireを用いてレベリングとアライニングを行った。

さらに，犬歯の水平化を図るために大臼歯から犬歯にかけてレースバックを用いた。

スペースクローズは0.019×0.025インチのステンレススチールを装着し，エラスティックタイバックによるスライディングメカニクスを適用した。

【治療結果】叢生が解消され，良好な咬合関係と顔貌形態が達成された。